日本キリスト教会　広島長東教会だより

ミニバラ No.12

〒731-0135　広島市安佐南区長東 3-32-16　tel／fax082-238-3459

2006 月 4 月発行

わたしの主、わたしの神よ

「それから、トマスに言われた。『あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。』トマスは答えて、『わたしの主、わたしの神よ』と言った。イエスはトマスに言われた。『わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。』」（ヨハネによる福音書２０章２７～２９節）

主イエスが復活されたのは、十字架から三日後の日曜日のことでした。その日の夜、主イエスは、とある家の一室に集まっていた弟子たちを訪ね、御自身が生きておられることを、お示しになりました。ところが、トマス一人だけ、其処に居合わせなかったのです。そのため仲間たちは、直ぐに、「わたしたちは主を見た」、とその喜ばしい出来事を、トマスにも伝えました。しかしトマスは、喜ぶどころか、「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」と、何処までも疑い、折角の喜びの知らせを受け入れようとはしませんでした。

それから八日後、つまり次の日曜日、弟子たちは再び、同じ場所に集まりました。今度は、トマスも一緒でした。其処に、復活のキリストが現われ、トマスに言われました。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と。この時トマスは、弾かれたように、主イエスに対し、「わたしの主、わたしの神よ」と、以前の彼からは全く想像もできない、真に驚くべき信仰の告白を致しました。

トマスが、復活のキリストを信じ得たのは、理屈で納得したからでも、科学的に証明されたからでもありません。ただ彼は、日曜日に、キリストを信じる者たちの群に加わり、彼らの真ん中に立って、平安あれ、と言ってくださる、今も生きておられる復活の主に、実際に触れることが出来たからなのです。そして此れこそ、主の日と言われる、日曜日毎に、教会で守られる礼拝に於いて、今も繰り返し再現されていることなのです。日曜日に礼拝が守られるのは、この日に、主イエスが復活されたからで、この日行なわれる礼拝は、キリストの復活を祝い、復活のキリストを称え、復活のキリストと、相まみえるためなのです。日曜日の礼拝に集うことにより、トマスがそうであったように、疑う者は、信じる者へと変えられて行くのです。

ところで、素晴らしい信仰告白をしたトマスに対して、主イエスは、意外なことを言われました。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」と。私たちは、復活の主に直接お目に掛かれた人こそ、幸いな人だ、と考えます。しかし、主イエスは、「見ないのに信じる人こそ幸いだ」と、言われるのです。どうしてでしょうか。見ずして信じる者とは、実は、私たちのことなのです。キリストが復活されて、２０００年も経っているのに、今私たちは、まるで実際に見たかのように、キリストの復活を信じています。どうして、見てもいないのに、信じられるようになったのでしょうか。それは、信じる者たちの群、即ち教会に加わり、主の日毎に守られる礼拝に於いて、御言葉と聖霊を通し、今も生きて働かれるキリストに出会ったからです。世々の教会、世々のキリスト者は、皆そのようにしてキリストに出会い、復活を信じたのです。それは、初代のキリスト者たちも知らなかった、不思議な霊的体験であって、此れに与っているあなた方は幸だ、と主イエスは、私たちのことをそう言ってくださるのです。確かに私たちは、「キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、素晴らしい喜びに溢れています。」（ペトロの手紙 一 １章８節）

牧師　三輪恭嗣

（２００６年１月１５日の礼拝説教より）